
スイーツ王子

麻木いのり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スイーツ王子

【Nコード】

N6819T

【作者名】

麻木いのり

【あらすじ】

学校にある「第2調理室へ行けばどんな告白も成就する」というジンクスのせいで幼馴染をどこの馬の骨とも分からぬ女に奪われた！？スイーツ王子と呼ばれるその諸悪の根源・長谷川楓に物申さずにいられるかー！・・・という勢いで乗り込んだ結果、わたしと王子の間に「1ヶ月休まず調理室で料理をする」という変な条件が生まれる。

ちよっと暴走気味な咲月と楓のちよっぴりシリアスなラブコメディ。

01 (前書き)

初めての投稿で拙い部分もあると思いますがよろしくお願ひします。

うちの学校『せいれんがくえん星鈴学園』は生徒数・学科数が多くて有名な学校である。そんなうちの学校にはちよつと変わったジnkクスがある。それは、第2調理室へ行けば恋が成就するといった内容だ。

わたし、鈴木咲月すずきさつきは情報通である友達の葎野よしのゆいと机を合わせながら昼食を取っていた。クラスメートでもある葎野とは毎回お昼を一緒にしているけど、普段噂のことなんて聞かないわたしが珍しくジnkクスについて詳しく教えてと言ったため、今日はいつもと少し違う雰囲気。わたしがそうさせているんだけど、葎野もすごく驚いたけど分かった、と言ってからあげを箸でつつきながら説明を始めた。

「第2調理室は授業ではあまり使われておらず、放課後は調理部の活動場所となっている。その調理部には、スイーツ王子と呼ばれるお菓子作りの天才・長谷川楓はせがわかえが所属している。そして、彼は温厚な性格であると共に、王子と呼ばれるに相応しい容姿で女子から絶大な人気がある。そんな長谷川くんにご教授いただいた女子たちが次々と腕をふるったお菓子と共にした告白を成功させた、つてのが全容かな。」

「ふーん。」

「ちなみに、教えてもらうのにもいくつか条件があるらしくて、その条件をクリアできなければ教えてくれないらしいわよ。」

「そっか、葎野ありがと！」

「このジnkクスについて聞いたってことは、あんた誰か好きな人い

んの？」

飲み干したパックジュースを机に置いて葭野を見ると好奇心満々と
いった笑みと視線がこちらに向けられた。わたしが恋愛に興味がない
って知っているくせに、変なの。

「いるわけないじゃない。」

「じゃあ、何で聞いてきたのよ？」

「・・・悪の根源について聞かなきゃ敵が誰か分からなかったから
よ。」

それは昨日、突然知らされた事実のせい。

わたしには一条司いちじょうしという幼馴染がいる。司はわたしにとってかけが
えない存在で、ずっと一緒にいたいと思っていた。・・・なのに、
昨日電話で知らされた彼女の存在によってわたしの幸せはぶち壊さ
れた。なんでも、調理部に教わった彼女から送られたケーキにすご
く心打たれたとか。今度から帰りはその彼女と帰るから、一緒に
帰れないし休みの日も遊んであげられない日が多くなるとか何とか
言って電話は切れた。

なんで、そんなどこの馬の骨とも分からない女に司を奪われなきゃ
ならないの？だから、諸悪の根源であろう敵が誰なのか詳しく知る
ために情報通の葭野に聞いたのだ。

「・・・で、どうするつもり？」

「決まってるわ・・・」

「長谷川に物申しに行くのよ！その迷惑な行為をやめろってね！！」

パツクジュースを思いっきり握りつぶした。

放課後になり、わたしは第2調理室を目指して人気の少ない北棟に来ていた。北棟にはあまり使われていない第2・第3と頭につく特別教室が連なっていて、放課後に文系部活動の人が集まることが多い。調理部もその1つで、部員数もそんなに多くなかった気がする。速足で移動していると、ふいに曲がり角で人にぶつかってしまった。

「ごめんなさい！急いでいたから……。」

「いえ、こちらも不注意でした……。」

強打したお尻をさすりながら目を開けるとコンタクトを落してしまつたらしく相手の顔も周りの風景もぼやけていた。やばい、視力が人一倍悪いのに今日に限って替えのコンタクトも眼鏡も持ってきていない。

「立てますか？」

そう言つて立ち上がった男の子は目の前に手を差し伸べてきたと同時はこちらに近づいた。

「ごめんなさい、コンタクト落としちゃったみたいで探してもらいたいんですけど……。」

え、と彼が言つたと同時にパキリと何かが割れるような音がした。彼はどうやらコンタクトを割つたらしく、足元を見ると無残にも割れたコンタクトらしきものが見えた。

「本当にごめん！どのくらい視力悪いんですか・・・？」

「えっと・・・この距離であなたがはつきり見えない程度に。」

大分近い距離なのにぼやぼやした彼の顔立ちから表情は見えない。そして、彼は名案を思い付いたかのように言いだした。

「コンタクト弁償するついでに、今日の帰りは責任もって送ります。」

「そんなことしてもらうほどじゃないです。それに、今回ぶつかったのはわたしが急いでいたからだし・・・。」

「でもコンタクト割っちゃったし、すごく視力悪いみたいだから怪我でもしたら大変だよ。大丈夫、襲ったりなんてしないから。」

笑いながら冗談を挟む彼は引く気がないようだし、わたしは仕方なくそれを承諾した。正直、コンタクト弁償の件は家はあまり裕福つてわけでもないから結構助かる。それにこの状態じゃ敵を追い詰めようにも無理があるし、ここは素直に相手に従っておこう。

彼は段差があるときや横断歩道を渡るときなど丁寧に教えてくれた。繋がれている手も嫌じゃなかったし、というか少しドキドキしてる。恋愛ごとに興味がないわたしはちょっとやそつとじゃドキドキすることなかったのに、どうかしてる。

無事コンタクトを買ってもらい、着けると視界は鮮明になり、わたしは彼の顔見て驚いた。すごく端正な顔立ちで、上品に笑う目の前の彼は更にわたしの心を惹きつけた。本当に、今日のわたしはおかしい。なんでこんなに胸が高鳴っているんだろう。これ以上一緒に

居るとおかしくなってしまう、そう思ったわたしは最寄り駅に着くと彼にお礼をした。

「もう、見えるようになったんでここで大丈夫です。コンタクトも買っていただいて、本当にありがとうございます。」

「そっか……。ねえ、君の名前は？」

「デザイン科2年の鈴木咲月です。」

そう言うと「同じ歳だったんだ。」と彼が呟いた。わたしは平均身長だけど顔が幼いからきつと1つ下だと思われていたんだろう。そして、電車は次の駅を目指して扉を閉じた。……ちよつと待て、わたしは彼の名前聞いてないのに。

まさか、彼がかの長谷川楓だっただなんてこのときのわたしは思いもしなかったのだ。

「失礼しました」の一言を残して職員室の扉を閉めた。先ほどの国語の授業を爆睡したわたしは呼び出しをくらって貴重な昼休みを削られたのだ。いや、まあ寝ていたわたしが悪いんだけどね。教室に戻ると葭野が既に机を向かい合わせにして昼食をとっていた。

「ほはえりー。」

「食べながら喋らない。行儀悪いわよ。」

口の中の物を飲み込んだ葭野はごめんごめんと行って無邪気に笑った。葭野は美人なのに屈託なく笑うから少し幼く見える、またそこがかわいいけど。長い脚を組んでる姿はキレイなのにパンを口いっぱいに頬張るから少し残念な美少女となっている。けれどやっぱり美少女、葭野のには1つ年上の神崎先輩（これまたかつこよくて性格も良い）が居るのにも関わらず告白は絶えない。きっと神崎先輩は心配でたまらないんだろうな。とりあえず、わたしは葭野と神崎先輩のカップルが好きです、はい。

「それより、咲月今日はどうかしたの？どの授業もほとんど寝てるし。まさか、国語の田上の授業でも寝ると思わなかった。」

「それが、昨日はちょっと眠れなくてさ。」

昨日のことを思い出すたびに、なぜかドキドキして胸がぎゅゅと締め付けられる感覚がして眠れなかったのだ。

「へえ、それで昨日は結局長谷川に会ったの？」

「それが、ちょっとあつて会うことはできなかったの。今日こそは絶対に会って一言言つてやるんだから！」

それを聞いて無頓着な様子になつた葭野は再びパンを頬張つた。わたしも黙々と食べているとクラスの女子が肩を軽く叩いてわたしの名前を呼ぶとお客さんだよ、と言つて教室の入口を指差した。見ると、そこには昨日の彼が居た。

彼に寄つていくとふわりとやわらかく微笑んだ。なんだか周りが少し騒がしいのは気のせいじゃないと思う。

「良かった、無事学校に来てるみたいで。」

「はい、おかげさまで。本当にありがとうございました。」

「いいよ、悪いのは僕だし。用事はそれだけだったから、お昼に邪魔してごめんね?」

そう言つと彼は優雅に去つて行つた。クラスの女子が何か聞いたそうにうずうずしてるけど、面倒くさいしすぐに葭野のところへ戻るとポカンとしていた。

「葭野、どうかしたの?」

「どうかしたはこっちのセリフよ。昨日で一体何があつたの。」

昨日のことを掻い摘んで話すと葭野は納得いつた様子でうんうん頷いて気持ち悪い笑顔を浮かべていた。正確には、葭野の笑顔はわたしにとって不気味だったただけで美少女の微笑みだった。

「おもしろいことになってるわね!。」

なんとも思ってたなかったこの葭野の呟きに事実を知っていたらどんなに怒り狂っていたらろうか。午後の授業が始まる予鈴が鳴って、合わせていた机を黒板の方向へと戻した。

HRが終わって、葭野は一言楽しみにしてるからと残すとさっさと帰って行った。他人ごとだから楽しんでるのだろう彼女に少し腹が立ったけど、そんなことより憎き長谷川楓のそこへ向かうことが先決だと思ってわたしも足早に教室を後にした。

今日こそは、と意気込んでわたしは第2調理室の扉を勢いよく開けた。そこには、数人のエプロン姿の女の子が湧きあいとした空気をだして調理器具を手にしていた。そして、教卓の調理台にはエプロン姿の彼が立っていた。いきなり入ってきたわたしを見て目をきよとんと丸くさせている。もしか、と嫌な予感がしたけど、確認しなければ何も始まらない。わたしは彼まで一直線に歩いて行くと周りの女子たちが少し騒ぎ出した。

「鈴木さん、調理室に何か用事？」

「ええ、……あなたが長谷川楓くん？」

「そうだけど、僕に用事だった？でも、今は料理教室中だから手が離せないんだ。」

「……そう、じゃあ終わりそうな時間にまた来るわ。」

こんな茶番はやめてください、って女の子たちの前で言うべき言葉じゃないだろうから調度良い。そんなことしたら、わたしはきつと袋叩きにも合うつんじゃないだろうか。恋する女の子は怖いしね。いや、わたしは恋してるしてないに限らず女の子は怖いと思うけど。

6時ごろに終わるから、と彼　長谷川楓はわたしに言った。わたしの睨む様な目と彼の目が合ったときに、彼は何か感じたのだろう。わたしはシンとした空気の第2調理室を出てある場所に向かった。

サッカー部の活動場所である第1グラウンドが良く見えるわたしの隠れスポットは第2調理室と同じ北棟にある第4科学室だ。ここもやはり普段はあまり使われていないせいで少し埃っぽい。そして、星鈴学園七不思議内にある舞台でもあるから気味悪がって人は寄ってこない。わたしは週に何回かここに通って、サッカー部である司の活躍を目にしていた。まあ、もうこんなことをするのも今日限りにしたいと思っているけど。

彼女が居る司に付きまといたら、きっと遠ざけられる。いつだって司の彼女はわたしを目の敵にして、関係のない人を使ってまでわたしを邪嫌に扱うのだ。その度に司はわたしを守ってくれたけど今回は違う。

彼女ができたって、司はいつも通りわたしと行き帰りを共にしてくれたし週末はどちらともなく遊んだ。だけど、あんな言葉をしかも電話で言ったのだ。その行動はわたしを遠ざけようとしていることを示している。それに・・・、あんなの見たら彼女にも司にもこのどうしようもない虚無感と怒りをぶつけることはできない。あんなに、仲良く帰る司と彼女を見て邪魔をできるわけがない。司の幸せは、わたしの幸せでもあるんだから。ただ・・・、一緒にいたいだけなのに。

夕焼けの中、自然とこぼれる涙をぬぐうこともできずに、わたしはひたすら司だけを目で追った。

涙をぬぐって、6時を指した針を見てわたしは再び第2調理室へ向かった。女の子たちは帰ったのか長谷川楓1人が調理台に腰かけて待っていた。わたしに気付いて長谷川はさらさらの黒髪を夕焼けの光に反射させながらこちらを向いた。

「・・・で、用事ってというのは？なんだか穏やかなことじゃなさそうだけど。」

「ご明答。わたしはあなたにあの菓子作り教室をやめてもらいたいの。」

「それはなぜ？」

涼しげな瞳はまっすぐにわたしを射抜いた。

「わたしの大切な幼馴染がどうやらあなたのその教室の生徒さんらしくってね。何でも告白の際に渡したケーキは彼の胃袋を射止めるのに絶大な効果だったそうよ。そのせいでわたしは幼馴染を取られちゃったんだけどね。」

「・・・それは、僕のせいとは限らないんじゃない？僕を責める前に君が一番憎んでいる彼女を責めるべきじゃ？もしくは、その射止められてしまったバカな男を責めれば？」

「・・・それができたら苦労してないわよ。」

なんだか目の前の彼の様子がおかしい。紳士な態度はまるで仮面だ

ったというかのような凍てついた笑顔でこちらを見ている。彼がわたしを敵だと判断したからの態度なの？胸がツキンと痛んだ。

「わたしが彼女を責めるなんてこととして幼馴染に伝わったらますます遠くに行っちゃうじゃない……。それに、わたしは恋愛が大嫌いよ。恋愛はその人をおかしくさせるもの、そうじゃなかったらあんなことにはならない。」

恋愛が絡んだ人は特別に面倒な生き物になりさがる。嫉妬の感情を司の彼女はわたしに向けた。おかげでえげつないいじめにもあつたし、本当に人生が終わるかもしれないと思ったときもあつた。それに、そんな陳腐な感情は一時のものでしかないのだ。そうじゃなかったら母は今も父と幸せに暮らしていたはずだ。

「とにかく、こんな馬鹿げたマネはやめて。あなたの行動のせいでわたしは司を奪われたんだから……!!」

「……話はそれで終わり？」

今までの彼と打って変わった低い声が聞こえた。彼は先ほどよりもっと凍てついた黒い微笑を浮かべていた。

「聞いていれば、ごちゃごちゃと自分勝手な感情を並べ立てて……満足した？所詮、押しつけにしかない自分の理論を語るのには楽しかつた？でも、そんなのは俺がこの料理教室をやめるに相応しい理由になんかならないんだよ。……そんなに止めて欲しければ、1つ条件をくれてやるよ。」

「その条件ってのは？」

「1か月、この料理教室に通うことだ。」

「……いいわ、その条件を守ったらあなたはこの茶番を止めてくれるのね。」

「ただし、この条件を破ったら……お前は一生俺の奴隷決定だから。」

どうやらこのスイーツ王子、お腹の中は真っ黒みたいです。

スイーツ王子は腹黒王子でしたーってことなのか、なんだかわたしに向けられる奴の笑顔は全て黒い微笑に見えるのはわたしの目の錯覚なのだろうか？

「あ、言っとくけど無遅刻無欠席で毎日調理部に通うことを意味してるからな。」

「・・・はあ!？」

ちよ、どんな用事があったってサボるなってこと!？冗談じゃないわ!!何が嬉しくて毎日お前のところに通わなきゃいけないの!、と言おうとしたけどそれはあの王子の言葉によってさえぎられた。

「よく考えてみるよ。お前の意味不明な理由のせいで、あの料理教室止めるんだからそれなりに意欲とか見せて欲しいってものだ。彼女たちも同様に休むことはないんだから、お前には同時にあの料理教室に通う条件を満たしてもらいたい。」

「・・・一理ないこともないわね。この料理教室に通う条件って一体何なの?」

霞野もああ言っていたけど、本当に何なんだろう。たかが料理教室に通うだけで条件が必要だなんて変な話だ。

「簡単さ、途中で投げ出さないことと俺を好きにならないってことが条件。」

「・・・なるわけないじゃない。」

どうしてあんななんか好きになるのよ。まあ、あの王子様のような容姿で紳士な振る舞いをしていれば勘違い女が出てきても仕方ないとは思っけど。

「じゃあ、早速明日からよろしくな。」

余裕な態度の王子がむかついたけど、わたしはおとなしく料理教室についての説明を少し受けてその日は帰った。・・・ていうか、わたしの中で王子呼びが定着しつつあるんだけど・・・どうしよう。長谷川楓ってフルネーム呼びもつかれるし別にいつか。それよりも明日の朝は葭野に事実を教えてくれなかったことについて問い詰めなきゃ、とすぐにわたしは頭の中を切り替えた。

家に帰ると珍しく満みづるさんが帰ってきていた。わたしがリビングに入ると「おかえりー」と優しい笑顔と声が出迎えてくれた。リビングには裕ゆたかさんが作ってくれたである晩ご飯がおいしそうなおいと一緒に並んでいた。暁あかつき月の分だけなくなったので、部屋にでもいるのだろっ。

わたしはその日の夜もやっぱり王子のことを思い出してはドキドキして眠れなかった。

06 (後書き)

咲月のお家のことはもう少し先でお話ししたいと思います。

朝、教室に入ると葭野が真っ先に抱きついてきた。

「どうだった!？」

「最悪よ、このバカ。」

料理教室とやらに行かなければならないことや諸々の事情を話すと笑いだしたのでむかつて頭を叩いてやった。あまりにも良い音を出したので嬉々として満面の笑みを浮かべていると葭野は叩かれた箇所を抱えて抗議の声をあげた。

「やめて! 咲月と違ってバカなんだからこれ以上バカになったら咲月のせいよ!？」

「いや、もう見事に頭が空っぽな音を出してたし手遅れよ。それに、黙ってた葭野が悪いんだからね、もうノートも宿題も見せてあげないから。」

「ごめんなさい、咲月様!!! ジュース一本で許してください!」

「いちごミルク2本で手を打とう。」

2本も!?!と叫んだ葭野を睨んでやるとごめんなさい2本買わせていただきます、と葭野が小さく言った。わたしの席へ移動するといつものように葭野は前の席に座ってそうだ、と呟いた。

「咲月くん、今日の朝見たよ。一条くんと一緒に登校してたけど、

「あんたは一緒じゃなかったわね。」

「別にどうだっていいじゃない。」

そんなの初めて知った、とぶすつと子供みたいに頬を膨らませていると「拗ねるな拗ねるな」と葭野の指がわたしの頬を突いた。お見通しってやつですか。

「それにしてもあんたたち双子と一条くんは正確まるで違うわよね。」

「それはもう聞き飽きたって。」

本人が一番思っていることを他人から言われることは何でこんなにイライラさせるんだろう、あ・・・凶星だからか・・・。わたしと暁月は双子であると同時に面白いくらい似ていない。二卵性双生児だから顔とか外見はところどころ似ている程度だけど、正確は全く逆だ。わたしが横暴な性格をしているのに対して暁月は気持ち悪いくらい優等生で温厚な性格をしている。それこそ、暁月はまるで王子のような感じで、容姿端麗なおまけに生徒会長をしていてスポーツも勉強もできるといった文武両道な人だ。超人すぎて血が繋がっているのか疑うくらい、本当にできた人間なんだと思う。おかげでこっちは比べられて散々な思いをしたけれど。司はそんなわたしをいつも励ましてくれた。そんな司もサッカーが大好きで、県の選抜に選ばれるくらい優れた選手だ。わたしは絵を描く以外に才能は特に関心しなかったんだけどね。

「いいのよー、人間ちゃんとおひとつ特技があれば誇れるんだから。」

「まあ、ないよりマシよね。」

なんて、葭野と他愛なくしゃべってるけど、本当に絵が得意じゃなかったらこのデザイン科には来ていなかった。デザイン科に入らなかったら、この広すぎる校舎内で葭野と出会うことはなかっただろうし、この才能は喜ばしいものなんだなと思った。

それにしても、暁月と司が2人で登校するなんて珍しいことだ。いつもはそこにわたしが居るか、もしくは司とわたしが登校することが普通だった。今はそれも難しいのが悲しいけど、用事が無ければあの2人がわざわざ時間を合わせてまで会うってことは無いと思う。何があったのか気になるところだけど、暁月とも家で顔を合わせる事が少ないから今日中に聞けるか心配だ。

・・・それに、今日は奴の料理教室参加初日である。馬鹿にされないためにも、余計なことは考えないでおこう。・・・そう、しばらく司のことは脳内に入れないでおこうとわたしは決心した。葭野が心配そうな瞳で見ているのに気付いて笑顔を向けると少し安心したような笑顔をこちらに向けてくれた。

第2調理室に向かうと昨日もこの場に居た顔ぶれが揃っていた。もちろん、王子も清潔そうな黄色のエプロンをつけて立っていた。今日も大変輝かしい笑顔を振りまいている王子を見て、昨日の冷笑を思い出したわたしは胡散臭なため息を吐いた。わたしが入っていきくと一気に視線が集まって、王子が前でわたしに向かって手招きをした。寄っていくと王子は周りを見渡してみんなが揃っているか確かめた。

「こちら、鈴木咲月さん。今日からみんなと一緒にこの教室に通ってもらうことになります。鈴木さん、何か一言どうぞ。」

説明もなしに急にぶつてこないでよ、と思いながらも前を見据えた。

「えー、2年デザイン科の鈴木咲月です。よろしくお願いします。」

ぺこりと頭を下げると拍手を送ってくれた。それぞれの顔を見て、この子たちは恋なんてものをしているのか・・・と思った。

「今日はクッキーを作ってもらいたいと思います。」

そう言った王子は、手順の説明をした。一通り説明を終えたら早速取りかかってください、との王子の一言でみんなは手を洗いだした。わたしもエプロンをつけて手を洗いに向かうと隣からかわいらしい声が聞こえた。見ると、隣には笑顔を向けた赤いリボンで結ばれたポニーテールの良く似合う女の子が立っていた。

「鈴木さんだよな？あたしは2年の普通科で橋あおいたちばな。これからよ

ろしくね。」

「うん・・・、よろしく。」

正直ここに居る恋する乙女たちとは仲良くなりたくない。彼女たちはわたしの嫌いな感情に酔っている愚かな少女。できるならこの手で目を覚まさせてやりたいくらいだ。そんなわたしの思いも知らず橘さんは笑顔でわたしの横に居たままであった。できるなら作業は1人でやりたいな・・・。

王子の説明通りに材料と器具を用意し終えて作業に取り掛かった。結局、わたしはそのまま一緒に橘さんと用意をし、その流れのまま同じ調理台でクッキーを作ることになった。

「ねえ、ねえ！咲月ちゃんって呼んでも良い？」

「ええ、どうぞ。」

「あたしのこともあおいでいいから！早速だけど、咲月ちゃんは誰のことが好きなの？」

しまった！今になって気付いたけど、ここに居る子みんなが恋してるんだ！つまりは、わたしもみんなに恋する女の子の一員としてここに迎えられたのだ・・・。好きな相手なんて居るわけじゃないし、かと言って下手に嘘について誰かの名前をあげることもできない。橘さんのあの笑顔は好奇心むき出しのものだったのか、と考えたわたしは口元がひきつった。

「・・・秘密。」

「えー！減るもんじゃないんだし、いいじゃない！それに、好きな人がかぶってるのを後から知るなんてことないようにするために聞いているんだから！」

・・・もしかしなくても、橘さんて計算高い女？無邪気な笑顔で打算的な行為をするなんて、恐ろしい女だ・・・。その後もしつこく聞いてくる橘さんに、一生懸命曖昧な返事をしたおかげか、どうやら諦めてもう聞いてくることはなかった。すると、調理台に影が落ちて後ろを振り返ると王子がいた。嫌味のような気持ち悪い笑顔を浮かべて。

「……鈴木さん、これは一体……？」

「……クッキーに決まってるじゃない！」

真つ黒にコゲたクッキーを見て王子はありえないと言いたげな表情を一瞬した。おかしい……。喋りながらではあったけど、橘さんと同じように作ったのに……。オーブンがおかしいの？わたしがおかしいの？橘さん以外の女の子たちは危険と判断したのか周りには居らず、遠くでこちらを覗くように見ている。

そう、わたしは料理が苦手なのだ。別に隠している訳ではないから、事前に王子に言うべきだったかな？裕さんの手伝いを暁月と一緒にしても、暁月は上手にするのにわたしは料理だけはどうしてもできなかった。どうしてか、わたしが料理を手伝うと食べられるような味じゃなくなってしまうのだ。そして、キッチン立ち入り禁止令が満さんから受けてしまったため、料理は本当に久しぶりだった。あときはまだ自分も小さかったから、今はもうできるんじゃないかと思っただけど、やっぱりだめらしい。

黒いクッキーの隣にあるおいしそうな橘さんのクッキーと比べて、すごく惨めな気持ちになる。こんな消し炭のクッキー、食べられたものじゃないかと考えて頭を下げていたら王子がわたしのクッキーに手を伸ばし、口に入れた。周りの女子含めわたしも目を見開いて驚いた。すると、王子が伏せられていた瞳をこちらに向けて、完璧な笑顔で笑った。この笑顔、絶対に裏があるよ。

「今度からは付きつきりできみの指導をさせてもらおうよ。」

周りに女子が居るから本性を隠してるのかもしれないけど、まずいならまずいってのはつきり言いなさいよ……。遠慮願いたいと思ってるのに今度は調理台の反対側に居る橘さんが花が咲いたように明るく笑った。

「わあー！咲月ちゃんいいなー！！うらやましいー！」

「じゃあ、橘さんがワンツーマンで教えてもらおうといいわ。」

「あたしは1人でもできるから平気！それより、あおいでいいって言ったじゃない！」

ごめんごめん、と軽く流す。もう1回自分の真っ黒のクッキーを見てから、食べてみた。やはり、言葉にならないくらいまずい。だけど、王子は食べても顔をしかめなかった。ただポーカーフェイスが得意なだけかもしれない……。でも言わずにはいられなかった。王子と目が合ったわたしはじっと王子の顔を見て、口を開いた。

「た、食べてくれてありがとう……。」

「……どういたしまして。」

言って直ぐにわたしは別の方向を見ると、クスリと王子が笑う声が出て、王子はまた別の調理台へ向かった。忙せわしない心拍音がわたしを支配して、一瞬にして頭の中が王子でいっぱいになった。なんで王子のことにこんなにも反応する自分が居るの？、と自問自答しながら少し赤い頬を抑えるわたしを橘さんがじっと見つめているのも気づかずに。

家に帰って1人になると、やっぱり司のことが気になった。暁月は教えてくれないと思うけど、帰ってきたら聞いてみよう。

隣の部屋からドアノブを回す音が聞こえた。暁月が帰ってきたと気付いたわたしは直ぐに暁月の部屋の扉をノックしに行った。扉の向こうからどうぞ、と聞こえたので遠慮なく入ってベッドの上に座った。ブレザーの上着を脱いでネクタイを取っている暁月に向かっっておかえり、と言うとただいま、と抑揚のない声が返ってきた。相変わらず機械的だな、と思いつつもわたしは本題に入った。

「ねえ、どうして今日は司と登校したの？」

「……………」

黙りこむ暁月はわたしの目は見ずに、どこか遠くを見る。

「たまたま同じ時間に出たんだよ。」

「そんな下手な嘘通じないわよ。司は部活の朝練があるから朝早く家を出るんだから、暁月はその時間を狙って待ち伏せしてたんですよ？」

暁月は頭が良いのに嘘を吐くのが苦手だ。答えられる質問には間を挟まずに答えてくれるけど、嘘を吐くとなるといつも黙って少し考えるクセがある。観念してくれたのか、暁月は小さくため息を吐いた。

「姉さんには嘘を吐けないね。でも、教えないよ。」

「何で！話の詳しい内容とは言わないから、せめてどんな話をしていたのかだけでも教えて。」

真剣な眼差しを暁月に送るけど、暁月の眼にもまた頑固たる決意が見えた。

「そんなに教えて欲しいんだったら司に直接聞けばいいじゃないか。」

「いや・・・、わたしは司に会えない。わたしの中から司という存在への依存がちゃんと消えてからじゃないと会えないわ。」

わたしにとつて司は、小さいときからずっと一緒だと疑わなかった存在。満さんの家へ来て、不安でいっぱいだったわたしから、容易く不安を取り除いてしまう。司は、心の拠りどころだったんだ。

そんなわたしに対して暁月は1人でも強く生きていくようになってしまった。双子の姉であるわたしが暁月と支え合っていくべきだったんだろうけど、弱かったわたしはそれができなかった。

小さい頃を思い出して、わたしは切ない気持ちでいっぱいになった。暁月に悪かったという気持ちと、司に会えない気持ちが入り混じった切なさ。暁月はわたしから視線を放して、またどこか遠くを見つめた。

「姉さん、そう思っているんだったら、今回が良い機会だ。司からちゃんと距離を取った方が良く。司だって自分の手で自分の道を掴んだ。姉さんも自分の道を自分で探さなきゃいけないんだ。」

「・・・そうね。」

離れるのは辛い、けどわたしがいつまでたっても司という存在を心の拠りどころにしていちゃいけない。わたしがだめにならないように、司が幸せになるために、暁月は諭さとしたんだ。

「暁月、ありがとう。」

笑顔を向けると暁月が小さく笑った。暁月のその笑顔が未来を諦めていると知っていても、わたしは何も言えなかった。

部屋に戻って、感傷な気持ちのままベッドにもぐった。結局、暁月に司のことは聞けず仕舞いだったな・・・。司は今ごろどうしてるのかな？彼女のことでも考えて眠っているのかな？考えている内に涙が出そうになって、唇を噛みしめた。ひとまず司のことは頭から追い出して、今日こそゆっくり眠ろう。

目を閉じて、深呼吸をして心を落ち着ける。そのとき、王子がわたしの真つ黒なクッキーを食べてくれたことが頭かぶを過る。久しぶりに作った料理は失敗したけど、食べてくれた上、作った笑顔かもしれないけど嫌な顔をされなかった。あれは嬉しかった、と笑みがもれた。トクトクと穏やかな心音が優しく響くのが心地よくて、わたしはまどろみに身を委ねた。

10 (後書き)

今のままじゃみなさんに意味が伝わらないと思いますが、咲月と暁月の含みのある会話の意味はこれから先お話が進めば分かると思うので。

とりあえず、今現在でこの話の存在は双子である咲月と暁月の間にある溝や2人の家の事情が複雑ってのだけ分かってもらえれば良いと思います。

よく眠れたおかげで、久しぶりに清々しい朝を迎えられた。用意を終えてリビングに向かうとキッチンにはかわいらしいエプロンをつけた裕さんがキッチンに立っていた。

「おはようございます、裕さん。」

「おはよう、咲月ちゃん。もうご飯できるから座って待っててね！」

裕さんは手際よくサラダを作っていた。おっとりとしやべる裕さんの抜けきらない女学生のようなかわいらしい外見はドジが多いと思わせがちだが、そんなことは全くない。料理はもちろん掃除などの家事全般は簡単にこなしてしまうし、手先の器用な裕さんは裁縫などの物づくりがとても上手である。うらやましくて扉の前でぼつと裕さんの行動を見ていると、不意に後ろの扉が開いた。無言で入ってきた咲月がわたしに邪魔、と一言呟いてすたすたと自分の席へと着席した。それが姉に対する態度？とちょっと思ったけど、朝が苦手な咲月が不機嫌なのは知っているから何も言わないでわたしも席についた。おいしそうな料理の数々が並べられた食卓を見て、ため息を吐くと同時にいいことを思い付いた。

「裕さん、これから朝食の準備手伝ってもいいですか？」

「っえ……、どうしたの咲月ちゃん!？」

裕さんがちよつと顔を青ざめて驚いた。そんなに驚かなくてもいいのに……いや、もしかして怯えに近いかも……。そう思っていると、咲月は食べていたものを喉につまらせてむせた。

「咲月ちゃん、無理しなくてもいいのよ？」

「いえ、裕さん。わたしも女の子だし、いつかはお嫁に行くでしょう？そのためにも、少しは料理の勉強をしようかなって思ってます。」

「やめなよ……、人間できることとできないことは決まっているものだよ。」

「ちよつと、それ単にわたしの料理が食べたくないから言ってるでしょ！分かってるんだから！」

自他共に認める料理の下手さをどうにかしたいだけなのに、2人してひどいものだ。

「まあ、キッチン立ち入り禁止令を出しているのは満さんだから、満さんに聞いてみましょう。」

「分かりました……。」

裕さんにそう言われて、持ち越しになってしまった。王子との約束を抜きにしても、昨日の自分の料理は本当にひどかった。だから王子とのこと関係なく、どうにかしなきゃやばい気がする……。それに、わたしのせいであんな真っ黒のクッキーを王子が食べたと思うと、申し訳なさで胸がいっぱいになる。

「それにしても、なんで急に料理しようと思ったの？」

「あ、そういえば昨日言っただけじゃなかったっけ？わたし、ちよつと訳合っつて調理部に顔だしてるの。それで久しぶりに料理してみれば案の

定悲惨なクッキーができたから、どうにかしないと思って思ったの。」
本音を言うと暁月は少し眉を動かした。どの単語に反応したのか
で読めなくて、不思議に思っていると暁月の方から口を開いてくれ
た。

「調理部、ねえ……。何があつたか聞かないけど、くれぐれも食
中毒者だけは出さないでよ。」

「あ、暁月！！その言い方はないでしょ！！」

暁月はわたしの言葉に素知らぬ顔をして、牛乳を飲み干すと席を立
った。クールな顔しやがつてー、と睨んでいると暁月と目が合った。
全てを見透かされるような、そんな気がした。

「あははははは！あんた料理オンチだったってわけ。」

「・・・なんかむかつく。」

根掘り葉掘り聞かれるままにしゃべると、葭野はお腹を抱えて笑いだした。クラスメートの痛い視線が集まっているのに気付いて、自分を落ち着けるように葭野はお茶を一口飲んだ。

「まあ・・・、わたしは調理実習で咲月と同じ班にならないようにするから、安心して！」

「いい機会だしうまくなるようにがんばるわよ。」

毎日調理部に行くついで、の産物ができるといいけれど、あまり期待はしないでおこう。葭野はわたしの顔を見ながら一通りふうん、とかへえ、とか呟いてにつこりと笑顔を作った。絶対何か良くないことを思われてそうだけどここはスルーしよう。

「とりあえず、今日も行かなきゃいけないんでしょう？」

「うん・・・、今日はこげたりしないといいんだけど・・・。あ、そうだ！橘あおいって知ってる？」

「橘あおい？ああ、普通科の？」

頷くと葭野は分厚い手帳を取り出して、次々とページをめくった。ページをめくる手を止めて怪訝そうな顔で一点を見つめた。

「この子、性格が悪いって噂されてるみたい。友達らしい友達は学園内には居ないそうよ。まあ、この子顔はかわいい部類だから男子には結構人気があるみたい。」

「性格が悪い・・・？」

昨日しゃべったときはそんな風に思わなかったけどな・・・、少し鬱陶しいとは思ったけど・・・。

「どこにでもある話かもしれないけどさ、友達の彼氏を奪っちゃったんだって。そこから女子全員からシカトされてるって言うのが今の現状だって・・・。あくまで噂だし、あたしも喋ったことなんてないから本当かは分からないから。」

「分かった、ありがと。」

昨日、橘さんがわたし以外の女子と喋らなかった理由はこういうわけがあったからなのか。どっちにしろ、あんなに友好的に接してくれる割にわたしと以外喋らないっていうところが不思議だったのよね。放課後になって、調理室に向かうとそこには昨日の女子たちは居なかった。もちろん、橘さんの姿もない。誰も居ない中1人扉の前に立っていると後ろからかわいらしい声が聞こえた。

「あら？あなた・・・入部希望者？」

「なになに！新入部員！？」

否定もできないまま女の子2人に詰め寄られると、その後ろから王

子とはまた別の背の高い男子がこちらに向かって歩いてくるのが見えた。

「こちら、あんまりいじめてやんなよ。……って言いたいところだけど、本当に入部希望者？」

「あ……いえ、長谷川くんに用事っていつかなんて言うか……」

どう説明すればいいのか分からなくなっていると聞きなれた凜とした声がした。

「すみません、先輩方。彼女は鈴木咲月さん、昨日から料理教室に来てる人です。」

「なんだ、長谷川の連れか。でも、今日は調理部活動日だけ……？」

パニックにならなくて安堵していると男の人が聞き捨てならない言葉を喋った。調理部活動日、つまりは料理教室実施日じゃないってことだよな……。男の人の言葉にも王子はどこ吹く風といった涼しい顔をしている。

「彼女、特別下手なんで毎日教えるってことになったんですよ。」

「え、特別下手ってそんなにひどいの……？」

わたしの顔を見て、そんな風には見えないけど……。と女の先輩の1人が言った。絶対この先輩わたしの料理見たら引く、という確信を持った。

かわらいらしい容姿の女の子とボーイッシュな女の子、そして部長と呼ばれる背の高い男の先輩がわたしの前に並んだ。

「俺は部長の久遠大地だ。」

「あたしは深山透子。」

「わたしは長谷川桜。3人とも3年で、わたしと久遠くんは調理科で、透子ちゃんは体育科なの。」

ふわふわとした柔らかい笑みを浮かべて説明してくれる長谷川先輩の言葉に疑問をもつ。

「深山先輩だけ体育科なんですか？」

「その顔はどうして運動部じゃないのかって顔ね！」

深山先輩がビシッと人さし指をわたしに向けて、疑問を当ててみせた。にこにここと変わらず笑ってるあたり聞いても大丈夫だった話らしい。

「ハードな授業受けて、放課後の部活でも真剣勝負してたら疲れちゃうからね。特に好きなスポーツっていうのもないし、じゃあお腹と幸せを満たしてくれる調理部に入っちゃおうっていうわけ。」

元気に短髪を揺らしながら喋る深山先輩の隣で、わたしは長谷川先輩が王子に話しかけているのを横目で見ると、すごい絵になってい

た。まるで、本当の王子様とお姫様。

「いつ見てもすごい絵になるわよねー！」

わたしが横で喋っている王子たちを見ているのに気付いたのか、深山先輩がわたしと同じ思いを素直に口にだした。これは誰が見たつてそう思うからだろうけど・・・、王子は長谷川先輩に穏やかな笑顔を向けている。ちくり、と胸に針が刺さったような感覚がする。

「ほんとあんたたち兄弟なのに、傍から見ると彼氏彼女みたいよ。」

「え！？兄弟なんですか？」

確かに苗字も一緒だし、同じ色素の薄い髪と整った顔立ち・・・。兄弟だと言えば仲が良いのも頷けるけど、王子は見た限り女子に分け隔てなく接していたからなあ・・・、裏で何考えてるか分からないけど。

「そうなの、これからも楓のことよろしくね？」

「いえ、こちらこそ・・・。」

・・・というより、王子に迷惑ばかりかけてしまう結果が目に見えるから、よろしくされることはない気がする・・・。

調理室に入ると、すぐに3人は各自好きなものを作り始めた。そして、わたしもエプロンをつけて王子の前に行った。

「とりあえず、昨日と同じようにクッキー作ってみて。」

その一言だけを言うと王子は椅子に座った。昨日と同じ作り方・・・？疑問に思いながらも同じ手順でやり始めた。王子は手順が進む度に青ざめて言ったけど、何も言わずに出来上がるのを待った。そして、昨日と同じ通り、オーブンから取り出したクッキーは真っ黒・・・って言うより危ない色をしている。わたしのクッキーを見た先輩たちは何とも言えない顔をした。

「な、なんか個性的な色・・・してるな・・・。」

「目視できる大きさの卵の殻があるのは気のせい・・・？」

「・・・ほんとに料理へたくそだったんだね・・・。」

わたしも先輩も苦笑いを浮かべる中、黙ったままだった王子が黒い笑み全開で口を開いた。

「お前・・・、料理する気あんのか？」

王子の笑顔を見た瞬間に、身体が震えた。

「要領が悪すぎる。グラニュー糖は2回に分けるところを全部入れる。卵を割るのに何回も失敗するからバターは半分溶けかけになる拳勺、殻の入ったまま使う。薄力粉が混ざり合わない内に焼き始める。オーブンの設定温度が200度って何を作る気だよ、そんなことすれば真っ黒にもなるのは分かり切ってるだろ！」

王子は一息にまくしたてた。わたしはそんな説教を床に正座をして聞かされたため、しびれがまわってきて今はそれどころじゃないんだけど・・・、さすがに怒っている王子を前に正座をやめたいだなんて言えない・・・。

「本当に、なんでクッキーもまともに作れないんだよ・・・。」
ため息が上から聞こえてきたけど、その疑問はわたし自信が一番知りたいことだよ・・・。

「よし、落ち込むのはこの辺にして、もう1回作るぞ。」
「えっ!？」

わたしはその一言を聞いて俯いていた顔を上げて、王子の顔を見る。
「何してんだよ、早く取りかかる。次は俺様と一緒に作るんだから失敗なんてさせねえよ。」

勝気な笑顔を浮かべる王子からそっと手を差し出されて、わたしは戸惑いながらその手を取った。その瞬間に、しびれた足でつまずい

て後方へと倒れそうになる。倒れる、と目を閉じて衝撃に備えるがそれは居必要のないものとなった。繋がれた手にぎゅっと引つ張られて目を開けると、王子の胸の中だった。

「ったく、本当にお前はどんくさいって言うか……。」

「い、ごめんっ!」

温かい体温とドアップの王子の顔に心臓が激しく反応する。慌てて王子から離れようとしたけど、腕をつかまれてそれもできなかった。この激しい鼓動が聞こえてしまうんじゃないか、そんな心配をしていると先輩たちが生温かい目をこちらに向けていることに気付いた。

「ふふっ、楓ったら鈴木さんのこと放っておけないのねえ。」

「そうみたいね。それに鈴木ちゃんと楓も結構絵になるわよね!」

「おいおい、イチャつくのもその辺にしろよ。日が暮れちゃうぞ。」

王子の腕が離れて、わたしは素早く距離を取る。火照った頬を抑えていると王子と目が合った。何事もなかったように涼しい表情……。

「ぼさっとしてないで、とっくと始めるぞ。」

「は、はいっ。」

そうか、王子は何にも思わないよね。わたしも、何を思っているんだろう……。こんな、まるで恋をしているような、馬鹿みたいなことやってないで……。しっかりしないと。そう思っても、王子に

抱きとめられた感触と温度がはつきりと、まとわりつくように離れ
なかつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6819t/>

スイーツ王子

2011年7月16日13時58分発行